

様式（第3条関係）

東京都とうきょうすくわくプログラム推進事業活動報告書

所在地	東京都町田市鶴間 3-3-7 ドレッセタワー南 町田グランベリーパーク1階
園名	ベネッセ南町田グランベリーパーク保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

音（1歳児クラス）

<テーマの設定理由>

乗り物の音、木を叩いた音、玩具のマラカスの音など子ども一人ひとりが様々な音に興味を持って楽しむ姿が増えてきたためテーマを設定した。また、歌を歌ったり、歌に合わせて手拍子をしたりする姿が見られ、音楽への興味を広げていきたいと思った。

2. 活動スケジュール

- ① <9月頃> 身近なもの（保育室内のもの、自然物など）を叩いたり擦ったり音を聞く。
- ② <11月～12月頃> どんぐりを使ってマラカスを作る。作ったものをクリスマス会や日々の保育の中で曲に合わせて鳴らして楽しむ。
- ③ <12月～1月頃> 鈴、カスタネット、太鼓など本物の楽器に触れて音の違いを感じる。
- ④ <ふれあいデー（1月17日）にて> 保護者も一緒に参加しながら楽器、廃材などを使って一緒に音を通した心の交流を楽しむ。

3. 活動のために準備した素材、道具及び環境の設定

太鼓、鈴、カスタネット、段ボール、手作り楽器（どんぐりマラカス）、トーンチャイム、鈴、カスタネット、グロッケン、マラカス、廃材（空きケース、プラスチック容器、ラップの芯など）

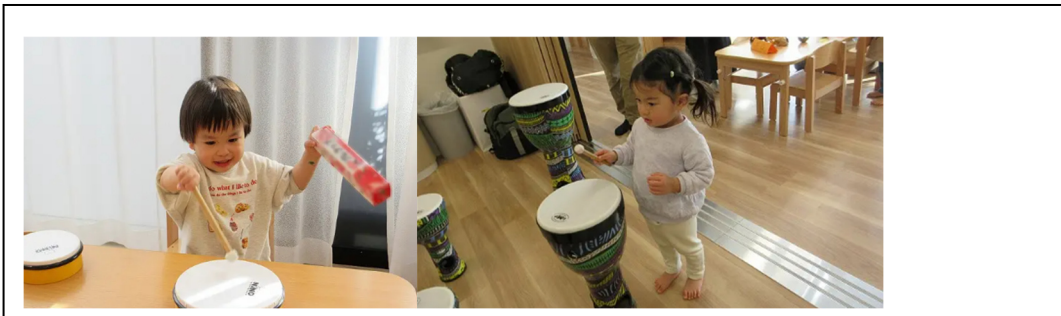
4. 探究活動の実践

<活動の内容>

タドルクラス…手作り楽器から本物の楽器へと段階的に移行し、様々な音を楽しめるように楽器を手で叩く、振ることで音を出すことを楽しむ。
ふれあいデー…保護者とともに楽器や手作り楽器、廃材を用いて音を鳴らすことを楽しむ。音の交わりを曲に合わせて皆で音を出す中で楽しむ。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

タドルクラス…音が出ると「あっ。きこえたね」「どーんどーん」「しゃかしゃか」と音を簡単な言葉で表現しながら楽しむ姿が見られた。また、保育者の姿を模倣する中で叩く強さを変えて音の大きさが変わる様子や歌に合わせてリズムをとりながら音を出す表現をしていた。音に触れる経験を重ねる中で、リズムが自然と身体に身に付き、後半には一定のリズムを保つ様子や休符や拍子に気づいて太鼓を叩く様子も見られた。
ふれあいデー…保育の中で触れていた楽器を「みてみて」と得意顔で披露して見せる姿や普段ナーサリー児（乳児クラス）があまり触れることのないトーンチャイムなどの楽器を鳴らして音の響きにうっとりとした表情をする姿が見られた。近くにいた友だちと顔を見合わせて微笑む場面もあり、言葉はなくても楽器を通して心を通わせていた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た職員の気づき>

・最初は「しあわせなら手をたたこう」や「おもちゃのチャチャチャ」など、歌の中にリズムが出てくる曲に興味を持ち、手を叩いたり、エッグシェイクを振ることを楽しんでいった。クリスマス製作では散歩先で自分たちが拾ったドングリを使った手作りマラカスを「ジングルベル」の歌に合わせ、振って音を出すことを楽しんだ。ふれあいデーでは、本物の楽器（鈴、カスタネット、トーンチャイム、ギロ、ジャンベ、グロッケン）や廃材（輪ゴムと段ボール、ラップの芯、ティッシュの空き箱等）に実際に触れ、「手で叩く」「バチで叩く」「揺らす」「こする」「弾く」など、様々な方法で音を出し、その違いや音色の響き具合を感じたり、歌に合わせて「リズム」を感じたりして楽しんだ。

・「音」は、子どもたちが「自分」で「叩く」「振る」「揺らす」「こする」「弾く」などのアクションを起こすことによって作られ、聞こえてくるものである。子どもたちが「音」に大いに興味を抱く要因の一つは、「自分」の起こす行動によって生じるものだからなのかもしれない。「自分」が「周り」に影響を与えているという感覚が、より強い興味関心を誘っているように感じる。

・手作りマラカスを振ってみると、手拍子やエッグシェイクとは音が違うことに気づき、同じ「振る」動作でも、道具によって色々な音を出せる事を体感している姿が見られた。今後、マラカスの中身を様々に変えて（米、豆、マカロニ、砂など）音の変化の違いを更に楽しんでみるのも興味関心を広げるきっかけになるだろう。

・ジャンベを叩く力を強くしたり弱くしたりすることで、音の大小の違いに気づき、保育者が「おおきく〜」と声を掛けると力を込めて叩き、「ちいさくちいさく・・・」と声を掛けると力を弱くして叩く姿も見られた。音の大小の違いを楽しむことで、子どもたちが、自らの関わりの仕方や力の入れ具合を知る機会にもつながったのではないかな。また、保育者の声を集中して「聴く」機会にもつながったように思う。

・子どもたちが「みんな」で叩くことで、「一人」で叩くよりも、大きな波動のようなものが生まれ、それを体全体で感じ、楽しんでいった。心から湧き上がったものが体に満ち溢れ自然と体が揺れ、または跳んだり、足踏みしたり、回ったりと、体全体で「音」を感じ取り、大いに楽しむ姿が印象的だった。どんな活動においても、きっかけは保育者が与えることはあっても、子どもたちが自ら感じ取ったものを形にしていくことを、今後の保育の中にも意識して取り入れていきたい。

様式（第3条関係）

東京都とうきょうすくわくプログラム推進事業活動報告書

所在地	東京都町田市鶴間 3-3-7 ドレッセタワー南 町田グランベリーパーク 1 階
園名	ベネッセ南町田グランベリーパーク保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

音（幼児【異年齢】クラス）

<テーマの設定理由>

身近なものから楽器へ幅を広げながら、様々な音に触れて子どもたちに表現する楽しさを伝えていきたいと思った。

2. 活動スケジュール

- 10月・・・身近な音がどこにあるか。
- 11月・12月・・・本物の楽器に触れてみよう。
- 1月・・・太鼓の指揮者になってみよう。

3. 活動のために準備した素材、道具及び環境の設定

・ジャンベ、トゥボロ（太鼓）・タンバリン・鈴・トライアングル・カスタネット・ピアノ・ギロ・木琴・ピアニカ・楽器のえほん。
環境・・・保育室内の中に広々とした空間をつくった。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・身近なものからどんな音が鳴るのか、いろんな場所を叩いてみて音の違い、低音・高音の違い・面白さに気づく。
- ・指揮者又はピアノの音に合わせてみんなで楽器を奏でる面白さを味わう。楽器の種類を知り様々な音の出し方を知る
- ・子ども達自身が指揮者になって一体感を感じる

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

身近なもので音を探してみようでは、部屋の中にある身近な物を組み合わせて音を鳴らしていくうちに「綺麗な音見つけた」「ここは大きい音になるよ」と音の違いに気づき、みんなに伝えたい気持ちから発表しあった。

本物の楽器に触れる時には、「どうやって鳴らすんだ？」の疑問から使い方を伝えた。太鼓では手でたたくことに驚いている声もあった。楽器を鳴らすことから楽しみ、徐々にピアノのテンポに合わせて音を鳴らし一体感を感じながら合奏の面白さへ発展していき、最後には年長児から「楽器を使って演奏会をみんなでやりたい」と意見がでてクリスマスの曲にあわせて合奏を楽しんだ。

太鼓の指揮者は大人が見本を見せ子どもたちは演奏者になりきり、指揮者の動きを見ながら奏でることを「面白い」と言っていた。次第に「指揮者やってみたい」という子どもたち。実際にやってみると「面白かったけど難しかった」とみんなで息を合わせて合奏をすることの難しさも感じていた。



<振り返りによって得た職員の気づき>

・普段の戸外活動の中で枝や石などの自然物を使って音を鳴らして遊んでいた姿から「音になるには」について関心を深めていった。

・先に楽器を使っただけの活動ではなく、いつも叩くものではない物を使って音を出すことで特別感を感じていた。大きい音を出すには大きい物を使うこと、小さい音を出すには小さい物でたたくと音になることに気づき、音の高い・低いにも気づきだしていた。「これはどうかな?」「こっちは?」といろんな材料を使って試してみる姿が見られた。普段の生活の中でも音に敏感になり自分の中でいい音になるとみんなに知らせており、活動を通して「音」についてより興味関心を抱くようになっていった

・楽器を使っただけの活動では、絵本で色々な種類の楽器を見て興味を広げ、よく使っていた楽器からあまり見慣れない楽器等様々な種類の楽器を用意することで子どもたちが自分で選択した楽器で遊ぶことができた。

・みんなで同じリズムをたたく楽しさや、曲に合わせて音を鳴らす気持ち良さを感じていた。また、他学年や老人ホームで演奏を披露することで、お客さんからもらった拍手に喜びを感じ、発表することの緊張感、達成感も得られていた。

子どもたちは歌うこと、音を鳴らすことが好きで、聴き慣れた曲に合わせて音を鳴らし、みんなで音を楽しむこと（音楽）で一体感を感じて楽しんでいることに気づき大人も一緒に楽しめた。音を鳴らすことから始まり、いろいろな音があることに気づき、一人一人が音を楽しむことから最後は一人ひとりの音が合わさり、みんなの音が、音楽となっていく過程の楽しさが経験できたのではないかと思う。体で音を感じて表現する楽しさを味わえたのではないかと思う